

地域のアートプロジェクトへの学生参加の取り組みに関する実践報告

A practical report on approach of students participation in project in a community setting

中田 稔*

Minoru NAKATA

1 はじめに

美作大学・美作大学短期大学部は、「食」、「子ども」、「福祉」、「建築」の分野で地域社会に貢献できるような専門的職業人を育成することを教育目標とした、地方の小規模大学である。しかし、本学が立地する地域社会が大学に期待する社会的な貢献活動は、そのような専門分野に止まらず、芸術文化、各種ボランティアやスポーツ活動など幅広いものがある。それは本学が、津山市内のみならず、美作管内で唯一の大学教育機関であるという特殊事情によるものである。

そんな中、本学には芸術系の学部や学科はないものの、アートに関心の高い学生により、筆者が顧問となって学生サークル「みまさかアートプロジェクト(MAP)」が、平成20年に結成された。そしてサークル結成以来、現代アートに関する地域からの活動の要請も多く寄せられ、可能な限りそれらに応じて活動を続けてきた。

しかし、平成21,22年度をピークにサークル員は減り続け、平成24年度は、実質的に活動に参加する学生数は、6,7名と、せっかくの地域からの依頼も断らざるを得ないような人員不足に陥っている。

そこで、当該地域唯一の大学として地域の要請がある以上、サークル活動を核として、本学の専門教育分野以外である、芸術文化面での地域貢献活動をどのように図るべきかを模索し、実践例を示すことは、本研究所の研究として有意義であるとともに、大学の社会的な貢献度を高める機会にもなると考え、実践に取り組むこととした。

2 「おかやま県民文化祭」とのかかわり

芸術文化活動においては、大学に対する社会的な貢献活動の要請のみならず、地域の芸術文化活動を活性化させようと

する取り組みは、日本各地において様々な形で行われている。例えば岡山県においては、平成20年に開催された「第25回国民文化祭・おかやま2010」を契機として、「そこで得られた成果を継続・発展させ、県民の文化活動の成果発表の場として、また県民が文化に親しみ、文化を核とした地域づくりが促進されるよう、県民総参加の文化の祭典を開催する。」という趣旨のもと、「おかやま県民文化祭」について、平成24年度は、以下のような事業内容が計画された。^{*1}

◇「おかやま県民文化祭」主催事業

○メインフェスティバル

「あつ晴れ！おかやま文化☆みらい祭」

- ・国民文化祭創作舞台の再演
- ・子どもたちを対象とした体験ワークショップの開催

○地域フェスティバル

「文化が町に出る！プロジェクト（備前・備中・美作）」

○分野別フェスティバル

「分野文化団体の成果発表支援」

- ・他団体との交流発表、ジュニア育成発表を重視

○文化活動支援・創造

- ・各種展覧会など

○「岡山芸術回廊」

- ・音楽、舞踊、演劇など、10部門

上記のうち、メインフェスティバルについては、平成21年度から1年交代で岡山県内の備前、備中、美作管内を開催地として行うこととなっている。また、地域フェスティバルについては、各管内で毎年開催地を決めて行うことになり、それぞれの地域で、規模は小規模であっても、より地域に密

* 美作大学短期大学部幼児教育学科准教授

着した形での作品発表の場を設けたり、芸術文化を核とした地域住民の交流が図られたりすることになった。

ちなみに平成24年度のメインフェスティバル開催地は、備中管内の倉敷市であり、美作管内で行われる地域フェスティバルは、勝英地域が開催地となった。

そんな折、大学に「奈義町地域おこし協力隊」*2の桑田聡志氏より、那岐山麓山の駅において、アートによる地域活性化の依頼があった。当初、実施時期までの期間が限られていることや、人員の確保や人員の輸送が困難なこと、また奈義町からの経済的な支援も期待できないことなどから、断らざるを得ないと考えたが、氏の熱心な勧誘とともに、勝英地域で開催される地域フェスティバルの連携事業として、是非取り組んでほしいとの「旅するアート実行委員会」*3からの依頼も重なり、この事業を引き受けることとし、本研究の実践研究として取り組むこととなった。

3 学生の確保と事業への取り組み

依頼された事業に対しては、学生サークル「みまさかアートプロジェクト(MAP)」が中心となって取り組むこととなるが、前述したようにサークル員が減少している現状では十分な活動ができない。そこで、以下のような方策を立て、依頼された事業に取り組むこととした。

(1) 人材の開拓と確保のための取り組み

・「みまさかアートプロジェクト(MAP)」がどのようなサークルなのか、また、どんな活動をしているのか、認知度が低いことが考えられるので、積極的にサークル活動の紹介と勧誘をする。また、サークル名を「ものづくりサークル みまさかアートプロジェクト(MAP)」とし、活動内容の理解を図る。

(2) 文化系サークルの連携

・今回の事業の活動場所は広大で、期間も長いので、MAPのサークル員の勧誘を進めると同時に、単一サークルのみの活動とせず、学内の文化系サークルにも参加の声かけをし、連携を図る。

(3) 情報提供に努める

・全国各地で行われる地域のアートフェスティバルや美術館の展示など、学生たちに現代アートにかかわる情報を提供する機会を設け、プロジェクトでの制作活動に活かすようにす

る。

(4) 制作方法を工夫する

・本学の学生は、専門的な美術を学んでいる訳ではないので、高度な技術を要するような制作は考えず、容易に制作できるものを考案するとともに、共同作業による制作を原則とする。

(5) 子どもとかかわる内容を活動に取り入れる

・本学の特色の1つである「子ども」分野の専門性を事業の中に積極的に取り入れることで、ものづくりを通した子どもとのワークショップ等に興味を持って参加する学生を募る。

4 「奈義町山の駅アートプロジェクト」の実践

依頼を受けて、上述の取り組みを通して学生の確保や活動内容の工夫に努めたが、勧誘はうまく行かなかった。また、他のサークルとの連携も難しく、なかなか人員を増やすことはできなかったが、辛うじてアースワーク部から1名、児童文化研究会から1名の学生の参加を得ることができた。

まず、本実践の概要は、以下の通りである。

(1) 企画名：「奈義町山の駅アートプロジェクト」(おかやま県民文化祭地域フェスティバル「旅するアート」共催事業)

(2) 現地制作期間：平成24年9月13日(木)～16日(日)

(3) 制作場所：那岐山麓山の駅

(4) 制作物及び制作活動：

a 「風の谷」 天空橋欄干への風車設置

b 「奈義MAP」 遊具広場に線路設置

c 「巨人の足跡」 広場にライトで表現

d 「秋の夜」 池周辺のライトアップ

e 「ワークショップ 染め紙の灯籠」

f 「ワークショップ 風車づくり」

(5) 参加学生：MAP 6人、アースワーク部1人、見文研1人

現地では、施設内のバンガローに宿泊し、滞在型の制作を行うことになったが、勿論、その期間だけでは全ての制作は不可能なので、6月頃より大学内で放課後等を利用してそれぞれの制作に取り組んだ。

作品a「風の谷」は、施設内の谷間に架けられた約70メートルの鉄橋の欄干に等間隔で風車を設置し、奈義町の特色である「風」を視覚的に表現した。欄干の色が赤のため、風車は白に統一し、約600個を設置した。風車の素材は、カラー

のクリアファイルを切って活用した。



(写真1) 風車の設置作業



(写真2) 「風の谷」①



(写真3) 「風の谷」②

作品b「奈義MAP」は、施設中心にある遊具広場を制作場所にした。ここには、子ども向けの汽車やトンネルを模した固定遊具があり、これらを取り込んで、広場全体を使って、線路を敷くことを考えた。線路は、全体で奈義町の地図を表すように配し、実際には鉄道路線のない奈義町に架空の路線を設置するという構想を形にした。線路は、白い農業用のビニルテープと木材を利用し、釘と木ねじ、タッカーで地面に固定する方法をとった。作品名の「奈義MAP」のMAPは、地図とサークル名を掛けたネーミングとした。



(写真4) 「線路」の設置



(写真5) 「奈義MAP」

作品c「巨人の足跡」は、当地に伝わる巨人伝説をヒントに、夜間限定の作品を制作した。遊具広場にチューブライトで足形を作り、夜間に点灯して暗闇に大きな足跡が2つ浮かび上がるようにした。



(写真6) 「巨人の足跡」制作風景



(写真7)「巨人の足跡(部分)」



(写真8)「秋の夜」

作品d「秋の夜」は、施設にある池周辺を夜間にライトアップするとともに、昼間に子どもを対象とするワークショップで制作した染め紙の「手作り灯籠」を池に浮かべて、このアートイベントの佳境を演出することにした。光源は全て電池式のLEDを用いたが、池のほとりに設置した小さな照明は、アースワーク部が事前に手作りした葉っぱ型の陶器の器の



(写真9) 子どもを対象としたワークショップ

上に置いた。アースワーク部の学生の当日参加は、1名のみではあったが、当日を迎えるまでに少しでもかかわりができたことは、今までにない成果ととらえたい。

今回の活動の中には、特に子どもとのかかわりを入れることを考えていたが、上記のワークショップ以外に、風車を作る体験も行い。数名の子どもたちが親子で参加してくれた。

5 「湯郷温泉足湯アートプロジェクト」の実践

奈義町でのアートプロジェクトをきっかけに、「おかやま県民文化祭地域フェスティバル」との連携を継続して行うことになった。勝英地区を開催地とされたこの事業は、「旅するアート」というテーマのもと、地区内4地域を約3ヶ月間にわたって作品が巡回するというもので、美作市湯郷でのアートイベントに学生も参加することになった。依頼は、湯郷温泉での協賛イベント「ガラスのクリスマス」を主催するガラス作家岡本常秀氏からのものである。以下がその概要である。

- (1)企画名：「足湯 YOU の花アートプロジェクト」(おかやま県民文化祭地域フェスティバル「旅するアート」共催事業)
- (2)現地制作期間：平成24年12月15日(土)・16日(日)
- (3)制作場所：美作市湯郷温泉 足湯ほか
- (4)制作物及び制作活動：
 - a「足湯 YOU の花」 足湯に手作りの花を浮かべる
 - b「足湯 YOU の花ツリー」 足湯に浮かべた花でクリスマスツリーを飾る
- (5)参加学生：MAP 5人、児文研1人、その他2人



(写真10) 足湯に浮かべた手作りの花

作品 a「足湯 YOU の花」では、にじみの技法で作った花をラミネート加工して、足湯に浮かべて楽しむという実践を行った。手作りの花は、大学祭の期間中も MAP のワークショップで多くの人に作ってもらっていたので、それらを浮かべるとともに、現地でも作ってもらい、その場で浮かべた。

冬場の寒い時期で、多くの参加者は望めなかったが、観光に訪れた人や地元の人などに作ってもらい、説明をする学生との交流を持つこともできた。お湯から引き上げた「花」は、発泡スチロールで作ったクリスマスツリーに貼付けて飾り、県民文化祭地域フェスティバルのクローズングイベントの会場を飾ることができた。また、今回参加した学生 8 名中 6 名が、奈義町のアートプロジェクトに参加した学生で、うち 1 名は、MAP 以外の学生であった。また呼びかけに応じて参加した 2 名も MAP 以外の学生であった。

6 考察とまとめ

今回、地域社会からの要請に応えきれないような現状となっている本学芸術系サークルをいかに活性化させ、芸術文化の分野で地域貢献ができるかを課題に実践に取り組んだ。また、現代アートの面白さや、それを介した活動の中でのヒト、モノ、コトとのかかわりを学生自身が享受することにより、大学内だけでは味わえない豊かな経験ができるのではないかと考えた。

そのためにもできるだけ多くの学生を集め、アートプロジェクトに参加させたかったが、人員の確保は思うように行かなかった。勧誘やアート情報の提供なども、作品展を開いたり、ポスターを掲示したりして学生も努力したが、思うようにならなかった。

一方、文化系サークルの連携については、現地での制作は十分ではなかったものの、事前の制作にかかわったり、少人数でも参加があったりしたことは、評価したい出来事である。

また、共同作業による制作を原則としたことも、学生たちは抵抗なく取り組めたようであるし、子どもとかかわる内容を活動に取り入れることも、学生にとってもよい経験となったようである。

これらの主観的な考察を、少しでも客観的なデータとして提示することが必要であると考え、以下のような概要でアンケート調査を行った。

調査概要

調査期間 : 平成 25 年 4 月

調査対象 : 美作大学文化系サークル所属学生

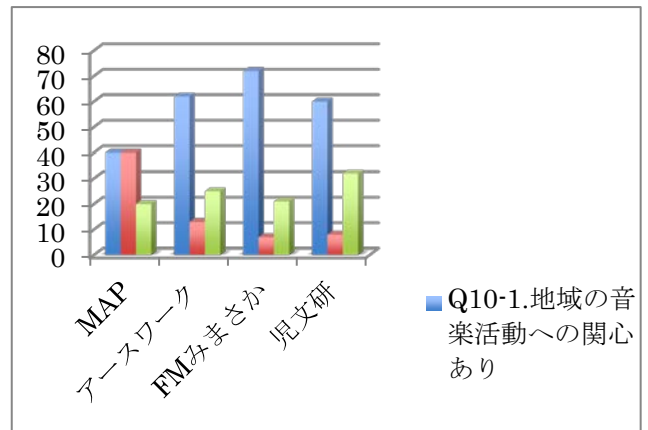
(MAP、アースワーク部、FMみまさか、児童文化研究会)

調査人数 : 52 人

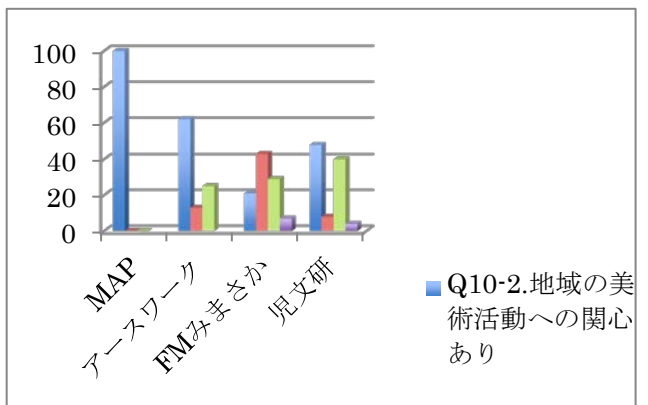
調査方法 : 質問紙法

以下は調査結果の抜粋である。

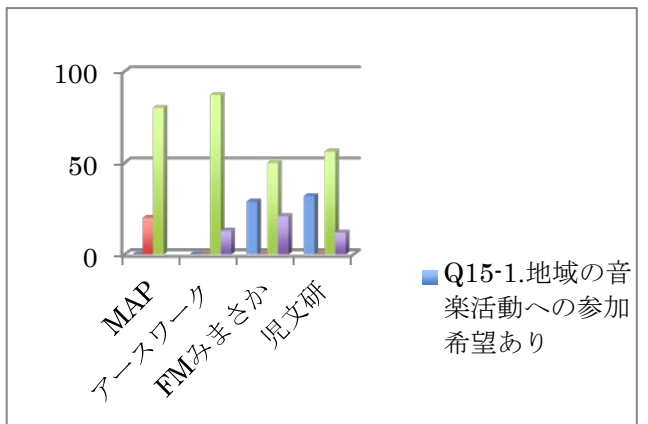
Q10-1 地域の音楽活動に関心があるか



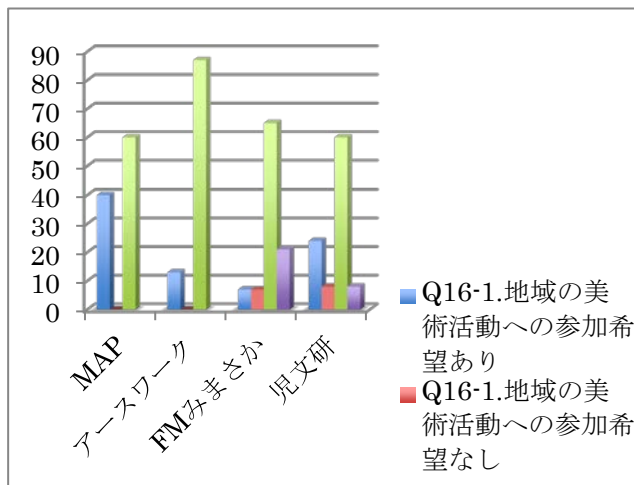
Q10-2 地域の美術活動に関心があるか



Q15-1 地域の音楽活動への参加希望あり



Q16-1 地域の美術活動への参加希望あり



これらのアンケートの対象としたサークルは、「MAP」と「アースワーク部」が、美術系サークル、「FMみまさか」が音楽系サークル、「児童文化研究会」が、子どもとの製作遊びやレクリエーションなどを行っているサークルである。

この結果から、地域で行われる音楽活動に関しては、どのサークルの学生も比較的関心が高いことがわかった。一方、地域で行われる美術活動に関しては、「MAP」や「アースワーク部」の学生の関心は高いものの、音楽系サークルの「FMみまさか」に所属する学生の関心は低く、「児童文化研究会」の学生も、音楽活動ほど高くないことがわかった。

また、地域の音楽活動や美術活動に積極的にかかわりたいかどうかの問いに対しては、「どちらでもない」という回答が音楽、美術両方でどのサークルも圧倒的であった。この結果から、地域の文化活動に「関心はあるが、積極的にかかわるかどうかわからない」という学生像が浮かんでくる。

今回2回のアートイベントに参加した学生は、地域の文化活動への貢献の意識が非常に高く、参加してよかったと回答をしていた。一方、関心がありながら一歩踏み出せないでいる学生が多くいる現状を踏まえ、これらの学生を地域の芸術文化活動にどのように誘っていくかが、これからの大きな課題である。

謝 辞

この度の実践にあたり、学外の「旅するアート」にかかわる皆様、並びに学内の関係者の皆様には、学生の輸送や宿泊

及び制作活動全般で、大変お世話になりました。厚くお礼申し上げます。

註

- 1) 「美づくりの里・旅するアート実行委員会」設立総会の配布資料「第10回おかやま県民文化祭のあらまし(案)」による
- 2) 平成23年度より総務省事業として、1年から3年の期間で主に都市からの住民を受け入れ、地域おこしや住民の生活支援等「地域協力活動」に従事してもらい定住化を図るもの
- 3) 「おかやま県民文化祭地域フェスティバル」として、全体会期を平成24年9月2日から同年12月25日とし、岡山県勝英地区の4会場(奈義、大原・東西栗倉、勝央、湯郷)を6人の現代アート作家の作品が巡回して展示されるアートイベント